学位論文内容の要旨

肝切除が施行された肝腫瘍20例において99mTc-GSAシンチグラフィおよびCTによる術後残存肝機能の術前予測の評価およびその比較と有用性の検討を行った。肝機能の指標にはKICGを用い、99mTc-GSAシンチグラフィおよびCTにて全肝、残肝、腫瘍の容積を測定し術後のKICGを予測した。CTによる予測値と術後のKICGとの相関係数R=0.569(P<0.05)で、シンチグラフィによる予測値と術後のKICGとはR=0.788(P<0.01)でCTより強い相関がみられた。また103症例におけるHH15、LHL15とKlとの比較ではそれぞれR=0.906(P<0.001), R=0.807(P<0.001)と良好な相関がみられた。血性ビリルビン値の上昇を伴わない58例におけるKICGとKlとの比較でもR=0.916(P<0.001)と良好な相関がみられ、術後残存肝機能の術前予測の評価はともにCTよりもシンチグラフィのほうが有用と思われた。またKLをKICGに代用することが可能と思われ、シンチグラフィのみの結果からでもKLを用いることにより術後肝機能予測がある程度可能と考えられた。

論文審査結果の要旨

本研究は、肝切除が施行された肝腫瘍20例において99mTc-GSAシンチグラフィおよびCTによる術後残存肝機能の術前予測の評価およびその比較と有用性の検討を行ったものであるが、従来 Olympus ではなかった肝機能の指標に用いられる KICG との関係や黄疸時における有用性の重要な知見を得ており価値ある業績である。よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。